

令和四年度 中期 高校入試問題 解説

【五〇分・一〇〇点※配点詳細非公表】

【一】説明的文章（論説）

〈出典〉

『国語教育第114号—豊かな言葉とは何だろう「語彙の森を育てる教育」』（大修館書店）

〈著者〉

斎藤孝（さいとうたかし）

明治大学文学部教授。専門は教育学、身体論。著書に「語彙力こそが教養である」「大人の語彙力ノート」「教養としての日本語」など多数。

問一 漢字の読み書き

漢字の学習は読み書きを基本として行っているが、それらに加えて、意味・使い方・（熟語の）構成にも意識を向けて学習しよう。漢字の意味を知っていることは、音訓を含めた読みの能力につながるうえに、初めてみる熟語の意味も推測できるように becoming くる。他教科でも国語でも初めて見る熟語は増えてくる。その際に意味を知っていることが学習者を助けてくれる。また、熟語の構成や漢字の成り立ちからの構成を意識することも同様である。語彙はすべての基本。多く身につけていこう。

問二 同音異義語の理解

同音異義語の使い分けについて問う問題。文中での意義を考えて適切な漢字表

記ができるように心がける。

「はかる」は①測る↓長さ、面積を測量、測定する。②図る↓意図・工夫。③諮る↓意見を求める。④計る↓計画・計算。⑤量る↓重さ・容量を計測する。⑥謀る↓だます・計略にかけるなど、同音異義の多い語であり、その場合に応じ、使い分ける能力は文章読解において重要なものである。ア正解はア。

問三 接続詞の空欄補充

接続詞は文章の前後のつながりを示すものであり、その正確な把握は、論理的に文章を読解する上で重要。

（1）は後に具体例が挙げられるため、ウ「例えば」。（2）は形式段落3・4をうけて、二つ目の方法（もうひとつ）について述べているため、エ「そして」。（3）は前述の内容を受けて、まとめの内容が続くため、ア「つまり」が正解。

問四 因果関係の読解

傍線部①の筆者の主張について根拠を述べているのが形式段落2。根拠の内容をまとめている（要約）のが、接続詞「つまり」に続く一文となる。接続詞を手掛かりに、具体例・要約・主張など文章の各文の役割が把握できる。

問五 漢熟語の適切な用い方

漢熟語は誤用の多いものでもあり、特に重複表現の誤りが目立つ。それは漢文読みができていないことによる。

例えばア「未納」を「未だ納めず」という漢文読みができれば「まだ」という言

葉をつけた重複表現の誤りがなくなる。漢熟語は事物を端的に表現できる為、文章を書く上で必須の知識。漢熟語力もつけていこう。イ「専有」の「専」は「もっぱら」なので重複表現。ウ「承服」は「相手のいうことを承知してそれに従うこと」の意。「賛同を得ることが難しいので」という前述に合わない。この場合は「承服いたしかねる」が正しい。エ「感服」は「強く心に感じ尊敬すること」の意。文章の内容と合っており、正解はエ。

問六 主旨の理解

生徒の会話についても熟読が必要。会話中の要素が、本文と照らして正しいかどうか、資料の読み取りは正確か、論理的読解を進めてきたかが問われる総合問題である。

生徒Aは「日本語の乱れについて危惧している」が誤り。また、「漱石の時代の正しい日本語」という表現も誤り。筆者は日本語の正誤については論じていない。生徒Bは「大学生の低学力化を憂えている」が誤り。筆者は大学生の会話から語彙量や読書経験、ひいては「教養」が汲みとれることは述べているが、「低学力化」は述べていない。生徒Cは「日本語の特性について述べている」が誤り。資料の読み取りは正確だが、漱石の作品を読むことが言葉本来の意味を取り戻すために必要だということは述べていない。生徒Dは「漢文の素養を身につけるため」に漱石の作品を読むことを筆者が勧めているのではないので誤り。生徒Eは正解。

筆者は形式段落²で「語彙の総量」＝「語彙力」それが「教養」に比例すること指摘し、「日本語の語彙力を鍛える」方法として具体例を形式段落³、⁷で述べている。語彙量が多い「漱石の作品を読む」ことを筆者がすすめている。

問七 図表の読解

資料の正しい読み取りには項目、数字、変化とその要因に注目する必要がある。読み取ったことを分析、正しく文章化する力を問う問題。

ウは「新しい表現には興味がないことが読み取れる」という分析があやまり。この調査結果から興味の有無を判断することは不適。

問八 文章の構造理解

各形式段落がどのようなつながりとなり、論理を構築しているかを読み解く力を問う問題。筆者の主張を正確に読み取る為に必須の力。形式段落の冒頭の接続詞や、前段落を受ける指示語、さらに文末表現などに着目し、意見部分・根拠部分・具体例部分など、その役割を読み分けることで正確な読解が可能となる。本文は、形式段落¹が話題提示。大学生の話し言葉を例に、「語彙」についての話題を提示している。形式段落²は接続詞「こうした」で前段落を受け、「語彙力の有無が教養をも示す」という事実について述べている。形式段落³は²を受けて、次の段落で述べる内容について示しており、この3つの段落のつながりは¹—²—

③となる。形式段落④・⑤は「語彙力を鍛える一つ目の方法」について筆者の意見を述べており、同列のつながり。形式段落⑥・⑦は二つ目の方法について筆者の意見を述べており、同列。形式段落⑧でそのまとめとして「読む学習」の効果を述べている。よって正解はウ。

【二】文学的文章（小説）
〈出典〉

『南風吹く』（光文社・二〇一七年）

瀬戸内海に浮かぶ五木島。過疎が進み、航太の通う高校も再来年には廃校になる。家業の和菓子屋を継ぐことを父親に反対され、宙ぶらりんな日々を過ごしている航太を、俳句甲子園を目指す同級生の日向子が仲間を誘う。幼馴染の恵一や個性豊かな後輩たちを仲間を引き込んで、俳句甲子園を目指す。

〈著者〉森谷明子

二〇〇三年に『千年の黙 異本源氏物語』で第十三回鮎川哲也賞を受賞してデビュー。そのほかの作品に、本文と同じく俳句甲子園を題材にした『春や春』（光文社・二〇一五年）がある。

問一 語彙・慣用句

A 「緊張の色の薄い」の「色」は、「表情や態度に現れる、その時々の子身の状態」の意。「色」が「薄い」ので、正解はウ。B 「目を丸くした」は、「驚いて目を見張る」の意の慣用句であるため、正解

はエ。

問二 類比関係と対比関係

傍線部「一般的な母との類似性」の直前を確認すると「それ」とある。「それは「舟」のこと。前述の「水の中では生きられない私たちを守ってくれる舟」、「舟に上がった時の、心からの安心感」などの舟についての記述から「一般的な母」の像を導き出す問題。正答はア。イは「強引に」が、ウは「常に見守る」が、エは「自らの危険をかえりみず」が本文を根拠にすると不適切。

問三 同義関係の要点要約

傍線部「今の解釈」は恵一の台詞中であって、河野の解釈のことを指している。より詳しく読むと、恵一は台詞冒頭で「そういうイメージで『舟』の字を使った」と述べている。「そういういた」を追ってゆくと、前述の河野の台詞末尾で「人間は水の上では舟を頼りにするけど、でも、その舟も実は結構ぐらぐらしたり、危なっかしかつたりする」とある。また、それを受けるかたちで河野は「それが私の解釈の、『稚魚』にもびつたりのイメージだと思った」と解釈を加えている。後者の『稚魚』にもびつたりのイメージ」に関して、本文を遡り、河野の台詞「手放されるからこそ」を根拠として参照する。アは「人の手によって滅んでしまう稚魚のイメージ」が河野の解釈と不一致。イの「優しい反面気弱である恵一の母のイメージ」は恵一の意見であり、そもそも河

野の「今の解釈」にあたらな。ウは正答。エは「必ず」が本文中にない記述。

問四 文脈に応じた語彙と心情理解

「虚を衝かれる」は「油断していて隙をつかれる」の意。この慣用句を踏まえ、本文中の恵一の心情を読み取り、適切な答えを選びとりたい。アは「納得してしまい」、イは「否定しなければならぬ」、ウは「弱気になつてしまう」が不適切。エは正答。

問五 解釈の変化の要点と本文の要旨

問題文の空欄部に、本文中から適切な言葉を抜き出す問題。抜き出しにあたっては、字数の制限や問題文の文脈を踏まえて答える。航太の解釈を追っていくと、「航太の頭の中に、ぱっと新しい解釈が浮かんだ」とあり、その直前部の河野の台詞を根拠に、空欄部Aは「手放せる」か「鮎の放流」が適切。空欄部Bは傍線部直後に「恵一はさつき、『海』といった」とあり、この「さつき」を遡り、恵一の台詞を根拠にして「京」が適切。空欄部Cは「根底にあるのは、海が苦手だから舟も苦手で、漁師であるお父さんと仲良く出来ない恵一の気持ちなのだ」を踏まえて記述する。問題文で『海』についての発言がヒントになった。そこから「とあるため、記述に際しては「海が苦手だから舟も苦手」の要素を割愛してしまう」と記述として不完全になつてしまう。

問六 助詞の用法による解釈の変化

『舟』は『母』と似ている」の助詞「は」は「舟」をとりたてているため、aは「舟」が適切。『母』と『舟』は似ている」の助詞「と」は「母」と「舟」とを比較するはたらきをしている。本文では字形の類似が度々触れられているため、bは「字形が似ている」が適切。『母』は『舟』に似ている」の助詞「は」はaを解くときと同様のはたらきをしており、cは「母」が適切。

問七 複数資料の解釈を基にした考察

複数テキストを読解し、思考する問題。選択肢エ(生徒D)の「そんな不安定な自分を重ね合わせることを意図して舟を詠んでいた。」が不適切。問四でも確認したが、恵一は「虚をつかれた顔」をしており、意図してはいない。

【三】 古文読解

〈出典〉『古今著聞集』

鎌倉中期の説話集。橘成季編。平安中期から鎌倉初期の説話約七〇〇余話を集める。

問一 基本的な古語の理解

a 「やうやう」は物事が少しずつ移り変わる様子を示し、しだいに。だんだん。などと訳す。「枕草子」での「やうやう白くなりゆく山ぎは・・・」など、既習事項。イが正解。b 「ひそかに」は人にしられないようにする様子を表す。口語とも同義のため本文に即し、イが正解。c 「めでた

く」は強く心を惹かれ、ほめたたえる気持ちを表し、①大変素晴らしい、立派だ。②祝うべきだ喜ばしい。③愚かだ。などと訳す。正解はウ。

問二 古文の解釈(因果関係と内容展開)

1は傍線部を含む会話に注目。「この僧正は筆箒を嫌いなさる人である。そうであるので、」に続く「乗るべからず・(乗ってはいけない)」なので、理由は前述部分となる。

2については、用枝が「そうであれば打楽器をでも演奏しよう」と言って、「して乗りてけり(無理に乗ってしまった)」ので正解はエ。

問三 指示内容の理解

「さにはあらず」の「さ」は指示語である。人々から「筆箒か」と問われ、その答えとして「さにはあらず。(そうではない)」としているので、「さ」の指すものは、「ひちりき」となる。

問四 要旨と登場人物の心情理解

1(ここ)での「よしなきもの」は、用枝である。会話冒頭で、「だから言ったのだ」とあり、「よしなきもの(用枝)」を乗せたことで楽人たちが心配していたことが起こり、嘆いている。僧正の機嫌を損ね、宴の場がつまらないものになることを恐れていたのである。よって2の正解はエ。

問五 内容理解の問題

「当てはまらないもの」の出題に注意。

正解はオ。僧正が「口惜しきことなり」と言っているのは、会話冒頭からの仏の教えにあることを信じずにいたことに対してである。迦陵頻の声に似ている筆箒を忌み嫌い、これまで聞かなかったことを後悔する僧正の悔しさである。

問六 「係り結び」の知識

助動詞の活用については高校入学後の学習内容であるが、係り結びの知識があれば解ける問題。係助詞「こそ」の結びであるので、オが正解。

問七 文学史の理解

「古今著聞集」は鎌倉中期の説話集。古文は時代の流れや作者の理解などでより理解が深まる。

問八 主題の把握

本文の口語訳を正確に行い、登場人物の心情・行動・その理由をとらえることが大切。

本文は、僧正が仏の教えに合った言葉「筆箒は迦陵頻の声を学ぶ」を信じずに、己の考えだけで筆箒を憎んでいたことを「口惜しきことなり」と後悔する言葉を発している。よってウが正解。

【現代語訳例】

志賀僧正明尊は、昔から筆箒を嫌う人であった。ある時、明月の夜、湖上に三つの舟を浮かべて、管弦・和歌・漢詩文の(優れた)人に乗せて宴遊したが、楽人たちがその舟に乗ろうとするとときに言う

ことには、「この僧正は箏箏を嫌いなさる人である。そうであるため用枝は乗ってはならない。」と言って、乗せなかったところ、用枝は、「それならば打楽器でも演奏し申し上げよう」と言って、無理に乗ってしまった。

だんだん夜が更けていくうちに、用枝はひそかに箏箏を抜き出して、湖水に浸して湿らせた。人々が見て、「箏箏か」と尋ねたところ、「そうではない。手を洗うのだ」と答えて、何ともない様子で座っている。しばらくして、(用枝は)とうとう音取りの曲を吹きだしてしまったので、まわりの樂人たちが、「だから言ったのだ。とんでもない者に乗せて、興味がきつと冷めてしまうだろう」と、顔色を青ざめて嘆き合っているときに、その曲がすばらしくすぐれていて(人々の心に)しみた。聞く人はみな涙が落ちた。長年箏箏を嫌っていらつしやる僧正が、人より特に泣いていらつしやったことには、「正教に、箏箏(の音)は迦陵頻の声になぞらえられると述べていることがある。この言葉を感じなかったことは、残念なことだ、今こそ思い知った。今夜の褒美の品は他の人に授けてはならない。用枝一人に授けよ」とおっしゃった。(僧正は)このことを後々まで言葉に出して、お泣きになったということである。